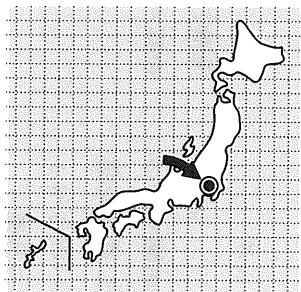


シリーズ  
子どもが育つ  
場所から

## 子どもと音楽の出会いの場をつくる

### 大学と地域の保育施設との連携事業を契機にした音楽活動

乳幼児期の子どもにとって音楽とはどのようなものなのだろうか。大学と地域との連携から始まった音楽ワークショップとコンサートの実践事例を通じて、保育における子どもと芸術との出会いの場について考えてみたい。



今号のレポーター

石川眞佐江  
静岡大学准教授。専門はピアノ、  
音楽教育。保育現場でのフィー  
ルドワーク、ワークショップな  
どを通して乳幼児と音楽とのか  
かわりについて研究している。

私が四歳のころ、母親の同僚であつた声楽家の演奏会でシユーベルトの「冬の旅」を初めて聴いた。なぜかたちまち夢中になり、その演奏会のポスターを枕元に貼り、カセットテープで何度も聴いた。他く歌い手による「冬の旅」の演奏会にも何度も足を運んだ。この演奏会を聴いていなかつたら、おそらく私が音楽を専門にすることを目指すことはなかつたのではないだろうか。それほどに印象的な音楽との出会いであった。

さまざま「子ども向け」の音楽、楽器、活動などの氾濫する現代であるが、本当に乳幼児期にふさわしい音楽との出会いとは、どのようなものなのだろうか。多くの保育施設では、年に一度程度は外部から演奏家を招き、園内コンサートの機会を設けている。しかしそれらは、ともすればその場限りのイベントとして子どもたちの生活を通過するにとどまってしまう。そこには予算的な制約や、演奏者がほぼ外部の人間になることから、日常の保育との連携が取りづらく、一回限りの「非日常」とならざるを

得ないといった側面がある。もちろん、一度きりであつても、「特別な日」の「非日常」としてコンサートを体験することは子どもたちにとって大切な経験の一つとなる。しかし、自分が芸術と教育の両分野にかかわるようになつて以来、子どもがまさに生活する保育の場にそれらを持ち込む時には、よりその経験が子どもの生活にとつて意味あるものとなるためには、どのようにすべきか考えるようになつた。そのためには、日々の生活や遊びと乖離しない自然な形で芸術に触れる場をどうつくり、またそれが彼らの今後の育ちの中にどう組み込まれていくかという視点を持つことが必要となる。

本稿で紹介するのは、このような課題意識のもと、大学と地域の保育施設との連携事業を契機にした音楽活動の事例である。始まりは、平成十八年度に東京藝術大学（以下、藝大）のアートリエゾンセンターを拠点に展開された、足立区と藝大との連携事業の一環であった。この事業は、藝大の在学生、卒業生、及び教職員を活用し、区内の子どもの豊かで健

全な育ちに寄与することを目的として、音楽教育支援活動を行うものである。

私は何人かの演奏家・研究者と共に保育施設での事業に関して企画の運営・実践を行つた。また連携事業を契機として、同様の活動を他の保育施設でも継続的に行つてゐる。本稿ではこれまでの活動の概要とその理念や内容について報告したい。

## ワークショップとコンサート

連携事業における音楽教育支援活動の大きな柱の一つは、藝大の在学生および卒業生を活用した多様な楽器、演奏形態のコンサートの実施である。しかし、保育の場で乳幼児を対象としたプロジェクトを実施するにあたつては、乳幼児の生活や発達に即した活動を組織する必要がある。そこで、子どもたちが音や音楽のさまざまな側面を遊びながら感じ取ることができるようにワークショップの体験と、ワークショップの経験とつながりを持つたコンサートの

鑑賞との両方を設定することにより、より幼児にと

つて豊かな経験が可能になるのではないかと考えた。

ワークショップでは、身体と五感を使つてイメージを広げながら音を感じたり鳴らしたりする活動を通して、音に対しても、またそれを出したり聴いたりする自分の身体に対しても感覺を開き、鋭敏にする。対してコンサートは、人間が長い歴史をかけてつくり上げてきた芸術文化の一端に生の演奏を通して触れ、音楽の美しさや面白さ、演奏のすごさなどを、五感や身体全体で受けとめたり味わつたり、同時に感じたことを表したりする。ワークショップを経験することにより、コンサートにおけるさまざまな音楽や楽器との出会いがさらに深い体験となる。両者を関連付けながら継続的に実施することで、周りの環境や人、モノ、自分の身体などと日々新しく出会いかかわりながら成長する幼児の表現を豊かに育む一助となるのではないかと考えた。

## ワークショップのコンセプト

ワークショップには、その時によつて打楽器、管

樂器、声楽、邦楽、鍵盤樂器などの専門家がかかわっているが、実践者全員の共通理解は、①イメージを豊かに持つこと、②そのイメージをもとに身体をコントロールすること、そして③それにより表現が変わること、これが音楽表現を支えているという点、④このような感覚は決して音楽演奏などに固有の特殊なものではなく、子どもたちが遊びの中で自然に駆使している力と近いのではないか、という点である。

幼児は遊びの中で、イメージをもとに身体を操作して何かになりきつたり、身の回りのさまざまな音

いと考へた。

実践全体に共通するねらいは以下の通りである。

①音・音楽を耳だけでなく身体全体で感じ取る。  
②音・音楽を感じながら五感を開き、自らの身体感覚を鋭敏にする。  
③音や言葉にかかるイメージを持ち、イメージを操作する。さらに想像を広げる。  
④イメージを持つて表現する。同時にイメージを持つことによつて表現が変わることに気付く。  
⑤芸術表現を支える型や技術に触れ、それを遊びと

ールしている。そこには、出したい音のイメージや、その音を生み出す自分の身体のイメージなど、具体的なものから抽象的なものまでさまざまなイメージが働いている。これらは実は、子どもの遊びの中で生まれる感覚と近いものがあるのでないだろうか。音楽の演奏というと、とかく日常とはかけ離れた特別の技術のように思われがちだが、その源にあるのは普段人間が生きていく上で自然に駆使している身体のあり方から来ることを感じてもらいたい

いう形で自らの身体を通して模倣し、習得しようとする。

- (6) 音をつくる—受けとめる、という相互のかかわりを通して人間関係を深める。
- (7) 楽器や声の発音原理に興味を持つ。

## ワークショップの内容

- ① 「いろいろなモノの音に耳を澄ましてみよう」



い分ける体験を通して、声を使った多様な表現を知り、歌唱表現につなげていく。

**内容** .. 声楽を専門とするリーダーがさまざまな擬音語や擬態語などを使った声の模倣遊びを行い、そこから裏声と表声を使った歌唱を体験する。

- ③ 「身体で音を感じてみよう」

ねらい .. 打楽器を用い、身体で直接音に触れる体験を通して、聴覚のみでなく音を身体全体で感じ取る。また、楽器とのさまざまなかかわり方を体験する。

- 内容 .. 長い筒の音を聴いてみると。糸電話を使ってスプーンの音を聴いてみると。糸電話を使つてスプーンの音を聴いてみる。絡ませた糸電話で、全員で一つの音を聴いてみる。

- ② 「自分の声で遊んでみよう」

- ねらい .. イメージを持つていろいろな言葉や声を使

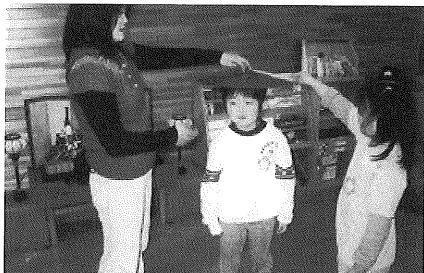
い分ける体験を通して、声を使つた多様な表現を知り、歌唱表現につなげていく。

**内容** .. 声楽を専門とするリーダーがさまざまな擬音語や擬態語などを使った声の模倣遊びを行い、そこから裏声と表声を使った歌唱を体験する。

**③ 「身体で音を感じてみよう」**

ねらい .. 打楽器を用い、身体で直接音に触れる体験を通して、聴覚のみでなく音を身体全体で感じ取る。また、楽器とのさまざまなかかわり方を体験する。

内容 .. シンバルをかぶつたり、大太鼓をおなかに当てたり、ジャンベ（西アフリカの片面太鼓）から出る風を顔や手で



触つたり、ウインドチャイムで首をなでたりし、耳だけではなく身体で音を感じる。

#### ④「息を使って音を出そう」

ねらい・身近な「息」に意識を向けることによつて身

体感覚を研ぎ澄まし、息や

身体の状態を微調整しながらコントロールすることでき

音を出す管楽器の原理を体

験する。

内容・さまざまなイメージ

で息を使い分けてみる。ビ

ンやストロー笛を用いて、自分の息が音になる過程を体験する。

#### ⑤「日本の響きを体験してみよう」

ねらい・長唄を題材に、邦楽独特の声の出し方やり

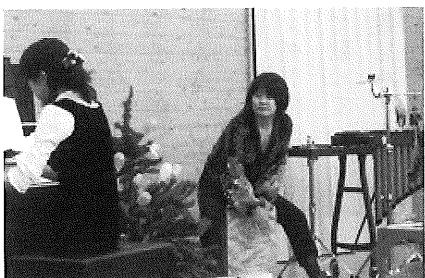
ズムなどを模倣しながら体験し、日本音楽に触れる。

内容・紙芝居の中の「おまじない」として長唄の謡いの一節を模倣し、リーダーの三味線に合わせて唱



#### コンサート

ワークショップは基本的に三歳児以上を対象としているが、その後行われるコンサートには在園児全員が（時には近隣の園の子どもも）参加する。ワークショップでリーダーを務めた演奏家たちが、今度は自分の専門の楽器を演奏する。編成も多岐にわたっており、これまでに長唄三味線、お囃子、箏などの邦楽から、声楽、鍵盤楽器、弦楽器、金管楽器、木管楽器、打楽器、



民族楽器など、鍵盤ハーモニカやトイピアノなどの教育用楽器や玩具楽器、果ては植木鉢や食器、掃除用具などの日用品を用いた即興演奏まで幅広く演奏されている。曲目を決める際に常に意識している点は、たった三十分程度のコンサートではあるが、その中に一つのストーリーと流れをつくることである。どこの誰が作曲した何という曲か、ということではなく、子どもたちが初めから終わりまで、流れとイメージを持つて聴けるような曲の構成と提示の仕方を心掛けている。

コンサートの場では、年齢による音楽の聞き方の違いが如実に現れて面白い。例えばある幼稚園では、三歳児が最前列、四歳児が真ん中、五歳児が最後列に座る。三歳児は、曲の激しい部分で頭を振ったり足を踏み鳴らしたりして全身で反応する。四歳児は隣の子と肩を組んで揺れだすなど、友達と一緒に感じることが楽しい。五歳児は、そんな三歳児の姿に「聴こえないよ！」と言つたりして、「静かに聴きたいのに」と言つたりして、自分なりの「音楽への姿勢」

や「聞き方」というものを獲得しつつある。

また、声楽家の歌声や金管楽器の音などを初めて耳にした子どもたちは、笑いだしたり、耳をふさいだりすることもある。初めて出会う、聴いたことのない音に対する素直な反応であろう。こちらが意図しないところに注目している子どももあり、声楽家が持つて歌つていた楽譜バイインダーをまねて画用紙で作り、保育室でそれを持って歌つていたという話や、ピアニストが演奏前に鍵盤をハンカチで拭く姿をまねして再現していた、などの後日談も聞いた。

保育者からは、「体験することによって、その後のコンサートへの集中力が高まつた」「直接楽器やものに触れる機会があり、工夫がされていたことにより、園生活での音楽だけでなく、音そのものやもつと広い意味での音楽について視野を広げていくことができた」「子どもたちがいろいろな音を体中で感じていた」「リズムによつて体が自然に揺れたり動いたりして、全身で音楽を感じていた」等の感想が寄せられた。

## おわりに

幼児が日常生活でごく自然に行っている遊びや行為の中に、イメージの豊かな広がりがあり、それを操作する心の動きや身体のコントロールがある。芸術と保育が融合する過程で大切なことは、子どもの生活を大事にしていくことである。拙速に即効性を期待せず、心身の開放や経験の蓄積から、表現者としての子どもの成長をゆっくり見つめたい。蓄積した経験が、その後の遊びや子どもの育ちにどのようにかかわってくるのか、保育者や保護者との連携を強めながら、さらに探っていく必要がある。同時に、音や音楽とかかわりながら遊ぶ子どもの姿を

そばで見ることで、保育者の音や音楽に対する意識の変容も起きている。それは日常の保育や子どもを見る目の変化につながっていく。

彫刻家のロダンは、「肝心な点は、感動すること、愛すること、望むこと、生きることです」と語り、「芸術家である前に人間であること！」と述べている。<sup>注</sup>

今後も、常に子どもの生活する姿を基盤に置きながら、広範囲で多様な幼児の世界に芸術がどのような意味を持ち、どのようにかかわっていくのかを考えていきたい。

注 中村雄一郎『人類知抄百家言』朝日新聞社 一九九六年

pp.798

付記…実践にご協力いただきました足立区立おおやたこども園、元宿こども園、いりや第二保育園、太陽保育園、まどか幼稚園、共立大日坂幼稚園の皆様にこの場を借りて御礼申し上げます。

実践参加メンバー…今川恭子（聖心女子大学）、村上康子（共立女子大学）、志民一成（静岡大学）、長谷川慎（静岡大学）、木村充子（桜美林大学）、石川眞佐江（静岡大学）、長井覚子（白梅学園短期大学）、小佐川心子（東京藝術大学）、市川恵、鹿倉由衣、小川実加子（以上、東京藝術大学大学院生）、森本美穂（打楽器奏者）